ノートゲルトに見る宗教改革

第19回

加藤　正宏

三、トマス・ミュンツァー

一、アルシュテットのノートゲルト（一九二一年）

アルシュテットはドイツのザクセン・アンハルト州の南西にあり、数キロメートルでチュリンゲン州との州境に到る。ベルリンとの距離は一八六キロメートル、ライプチッヒとの距離が六九キロメートルである。ルター関連の都市ではアルシュテットの東にルターシュタット・アイスレーベンが隣接する。

アルシュテットはトマス・ミュンツァーが一五二三年から一五二四年にかけて、牧師として礼拝改革やドイツ語による説教などの宗教改革を実践した都市である。ミュンツァーは聖書の言葉を階級闘争に翻訳し、農民大衆を理想社会建設へ導こうとし、ルターの穏健な改革に対して過激な改革をも厭わなかった。宗教改革の最初の一〇年間に世間の関心を集めたのはルターのワルトブルクではなく、むしろミュンツァーのアルシュテットであったという人もいる。

ミュンツァーもルターと同様にラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語を身につけており、聖書をドイツ語訳して説教したり、賛美歌を作ったりしている。徳善義和氏によると、ラテン語の原詩「来ませ、諸民族の救い主よ、・・・・・」が、ミュンツァーの訳では「おお主よ、全民族の贖いの主よ、来て、あなたのみ子の誕生を示せ。造られたるものはみなこれを賛嘆し、キリストはこうして人となった。」と、ルターの訳では「今きてください、異邦人の救い主よ、おとめの子と知られた方。全世界はこれを賛嘆するが、神が彼にこうした誕生を定めた。」となり、そこにミュンツァーとルターの信仰の姿勢の違いが見られるという。つまり、ミュンツァーの訳では「神」という語が消え、ルターの訳ではイエスの誕生の主体は「神」ご自身であるというのである。

ミュンツァーは体躯矮小で、顔は浅黒く、髪は黒く、眼光鋭く、粗野だが民衆の心に響く激烈な説教をしたといわれる。その説教が行われたのがアルシュテットであった。そのアルシュテットで一九二一年に発行されたノートゲルトの一〇ペニッヒ、二五ペニッヒ、五〇ペニッヒにミュンツァーが登場している。以下に、それぞれを紹介する。

◆一〇ペニッヒ

◇表面［写真1］

写真１ 1921年 10ペニッヒ 表面

最上段に「千年の都市」の文字、その下の左半分に聖書を開くミュンツァーの姿を描き、更にその姿の下にミュンツァーの紹介文が記載されている。それには「トマス・ミュン